



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	児童・青年期の抑うつ症状，躁症状，および自閉傾向に関する臨床的・疫学的研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	井上，貴雄
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(保健科学)
Dissertation Number	甲第11429号
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55306
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Takao_Inoue_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（保健科学）

氏名：井上 貴雄

審査委員	主査 教授	齋藤 健
	副査 教授	傳田 健三
	副査 准教授	境 信哉

学位論文題名

児童・青年期の抑うつ症状，躁症状，および自閉傾向に関する臨床的・疫学的研究

近年，児童・青年期の精神科臨床ではうつ病性障害や双極性障害などの気分障害に加え，広汎性発達障害に対する関心が高まっている。子どもの気分障害が従来考えられていたよりも多く存在することが明らかになってきただけでなく，広汎性発達障害においても以前より高い有病率が報告されるようになった。児童・青年期の気分障害と広汎性発達障害はともに近年になってから注目を集めるようになった障害であり，その実態や関連性については未だ不明な点が少なくない。

本論文は，一般の児童・青年における抑うつ症状，躁症状，および自閉傾向の実態を同時に調査し，それらの関連性について検討したものである。その内容は世界で初めて明らかにされる事実であり，臨床的にもきわめて重要な論文である。

本研究では北海道全域の小学校 24 校，中学校 28 校，高等学校 28 校を抽出し，小学 3 年生 650 人，小学 5 年生 711 人，中学 2 年生 847 人，高校 2 年生 1,527 人の計 3,735 人を対象とした。また抑うつ症状については千歳市民 4,258 人(平均年齢 60.5 ± 13.4)の結果と比較，検討を行った。

児童・青年の調査では協力を得られた学校に調査票と説明文書を送付し，生徒および保護者に対して倫理的配慮を十分に行った上で，同意を得られた者から調査票の回収を行った。調査票には，簡易抑うつ症状尺度（QIDS-J），躁病エピソード診断スクリーニング質問表（MEDSCI），自閉症スペクトラム指数日本語版（AQ-J）を用いた。千歳市民の調査では健康診断受診者に QIDS-J の質問紙を送付し，調査への協力が得られた受診者には記載後，健診当日に提出を求めた。

QIDS-J の平均スコアは小学 3 年生で 3.1 ± 3.2 ，小学 5 年生で 3.6 ± 3.2 ，中学 2 年生で 5.5 ± 4.3 ，高校 2 年生で 6.8 ± 4.4 点であった。多重比較より小＜中＜高校生と平均スコアが有意に高いことが確認された ($p < 0.01$)。また，各学年で約 3.7～19.4%の生徒が抑うつ群であり，約 2.8～11.1%に自殺念慮が疑われた。同時期に行った一般市民における調査結果では平均スコアは 3.5 ± 3.4 であり，抑うつ群の割合は約 4.6%であり，約 2.4%に自殺念慮が疑われた。一般市民と比較して中・高校生の平均スコアが高く，抑うつ症状や自殺念慮が疑われる者の割合が高いことが確認された。項目別の平均スコアでは自己評価の低さに関する「自分についての見方」の項目でスコアが高かった。MEDSCI の結果から，小・中・高校生では全体の平均スコアは 4.3 ± 4.1 であり，各学年で約 2.6～13.2%の生徒に躁症状が疑われた。AQ-J では全体の平均スコアは 20.4 ± 6.1 であり，小

＜中＜高校生とスコアが有意に高いことが確認された($p<0.01$)。また各学年で約3.0～7.8%の生徒に自閉傾向が疑われ、中・高校生で割合が高かった。AQ-Jの平均スコアと同様に下位尺度のコミュニケーションで小＜中＜高校生と平均スコアが高いことが確認された($p<0.05$)。

次に各症状の関連を調べるためにQIDS-JとMEDSCI、およびAQ-Jの各スコア間でピアソンの積率相関係数を求めた。その結果QIDS-JとMEDSCIにおいて正の相関関係が確認され、児童・青年期では抑うつ傾向のスコアが高ければ躁傾向のスコアも高くなることが確認された(相関係数0.40, $p<0.01$)。また、QIDS-JとAQ-Jの正の相関関係が確認され、児童・青年期では抑うつ傾向のスコアが高ければ自閉傾向のスコアも高くなることが確認された(相関係数0.36, $p<0.01$)。

抑うつ症状について、中・高校生では他の年代と比較して抑うつ症状のスコアが高くなり、抑うつ群の割合が増え、自殺念慮が疑われる者の割合も高いことが確認された。この理由として、中・高校生は抑うつや死についての関心が高まる時期であること、自己評価が低く将来や対人関係で不安や悩みが生じやすくなっていることなどが考えられた。また、児童・青年期のうつ病性障害が見逃されている可能性があるのではないかと考えられた。近年、青年期の自殺率が高くなっているという報告がある。以上より、今回の結果を踏まえ、学校や家庭において、一般の中・高校生では自殺念慮を有する者が高いという認識を持ちながら対応する必要があると考えられる。

自閉傾向について、広汎性発達障害の有病率は約1%とされているが、今回のAQ-Jの結果では各学年で約3.0～7.8%と高い割合で自閉傾向が疑われ、小＜中＜高校生とスコアが高いことが明らかになった。また、普通学級において知的発達に遅れはないものの、学習面や行動面で著しい困難を示す児童・生徒の割合は6.3%であったという報告もあり、今回の調査で自閉傾向が疑われた者と重なる者も含まれるのではないかと考えられた。

各症状の関連について、QIDS-JとMEDSCIおよびQIDS-JとAQ-Jのスコアで正の相関関係が確認された。児童・青年期の気分障害では約20%～30%の確率でうつ病性障害から双極性障害に発展するという報告があり、成人と比べてその可能性が高いと考えられる。QIDS-JとMEDSCIの正の相関関係は、児童・青年期のうつ病性障害と双極性障害との関連を示唆するものであると考えられる。また、児童・青年期の広汎性発達障害のcomorbidityの研究ではうつ病性障害を6.0～22.9%の割合で併存することが報告されており、児童・青年期のうつ病性障害のcomorbidityの研究では広汎性発達障害を36.2%の割合で併存していたことが報告されている。今回QIDS-JとAQ-Jで正の相関関係が確認されたことは、児童・青年期ではうつ病性障害と広汎性発達障害が併存しやすいことに対する裏付けになったと考えられる。

本研究によって、著者は一般市民と比較して中・高校生で抑うつ傾向が高く、自殺念慮が疑われる者の割合が高いこと、同時に自閉傾向を有する者が多いことを世界で初めて明らかにした。また児童・青年期における抑うつ症状と躁症状、および抑うつ症状と自閉傾向との間に関連があるという新知見を得たものであり、児童・青年期のうつ病性障害および広汎性発達障害の臨床において、正確な診断を行い、治療方針を決定する上で貢献するところ大なるものがある。よって著者は、北海道大学博士(保健科学)の学位を授与される資格あるものと認める。